

この御し難き人間の業

(1) ——ディケンズと出版者たちの闘争——

青 木 健

ディケンズの人生の足跡を追って行くと、ある特徴的な面が明らかとなる。それは、彼の人生におけるさまざまなターニング・ポイントに強く現れている。そこでは、彼の性格上の特質が原因で、事態がより一層紛糾したり、本来回避すべき事態にあえて激突した結果、問題をより複雑にしてしまうのである。結果がどうなるかを認識し、理解した上で、なおかつ自分を抑制できないだけに、凄惨ともいえるドラマが展開する。その要因は、彼の自己主張の強さ、悪く捉えれば、我の強さにあるともいえるし、強く現れる時には、偏執狂（パラノイア）的ともいえる性情が見てとれる。そのような状況に直接間接関わった友人・知人・関係者は、彼の異常性に困惑した結果、彼との関係（たとえ長く固い絆で結ばれていた間柄であっても）を絶つ状況に追いやられたりする。

それまでの関係性を絶つことを厭わないディケンズの姿は、ある時は、文学的使命に燃えた真摯な作家像として捉えることも出来るし、またある時は、主張が人間的忍耐を超えて、極端な行動に走る未熟な人間と捉えることも出来る。前者の認識をとるなら、作家・出版者・読者からなる「出版の連環」において、作家の優位性を初めて確実なものにしたという歴史的意義を、ディケンズの声高な主張の中に見出せるかもしれない。一方で、妻との別居に端を発した、「恩人」とも「後見人」とも言うべき友人・知人との断絶に見られる、極めて個人的なレベルでの我執は、ディケンズの特異な人間性を露呈していると解釈できるだろう。それまでの良好なつながりを敢えて破壊してまで我を通す、ディケンズの人間性は、作家の権利を主張する公的な姿とどのようにつながるのであるだろうか。

一方、ディケンズの異常とも思える行動は、人間的・個人的レヴェル

で終わるものではない。文学的なレベルにおいては、類似の行動が意味を持った表現形式を得て、作品を高質なものとしているのである。ディケンズが描く人物たちの中には、行為の結果が負の意味を持ち、その後の生き方にマイナスになることを十分理解していながら、衝動的に、あるいは自分を抑制できずに、予想外の行為や行動に走ってしまう結果、ジレンマに陥ったり、人生を誤る人物が多くいる。それは、主人公から端役の人物に至るまでさまざまな人物と場面で描かれるが、そこに生まれる文学性は、複雑な人間心理と結びついて、より高く、かつ深いものとなっている。本論では、ディケンズの実人生のさまざまな人間関係を詳細に跡付け、出来事の内容を明らかにした上で、ディケンズの取った行動・行為の意味を分析し、現実が生じた結果を精査する。その後で、ディケンズの作品で描かれる同質の行為・行動を分析し、作品の中でそれらがどのような文学的意味を持つかを論じる。

もちろん、一般論として、作家の文学的立場と、個人的な性格の問題はしばしば相容れないとしても差し支えないものと言えるし、文学は、自立性をもっており、そこに個人的な問題を持ち込むことの無意味さが指摘されることも理解している。その上で、ディケンズの実人生と文学の問題を考察したい。ディケンズにおいては、それほど両者の類似と矛盾が交錯しているのだ。

以下、既に明らかになっている、ディケンズが関わったいくつかの出来事を三つのグループに分け、そこで関わった人々との葛藤を論じ、そこに見出される共通する特質を分析する。第一のグループは、彼が作家として出発する際に関わった問題が中心となるので、関係者は必然的に出版者となる。第二グループには、ディケンズの文学観・道徳観と密接に関わると言う意味で、彼の作品になくてはならない挿絵画家がいる。そして第三グループには、妻との別居の件に関わった人々がいる。以上の区別は、論者の恣意的なものであり、研究者たちの間で共通のガイドラインがあるわけではない。従って、さらに別な類別の仕方があろうかと思うが、さしあたりは、この区別に沿って論を進める。

1. マノン？あるいは、作家の権利意識？——マクローンとの対決

実質的なパトロンの存在を喪失した十九世紀の作家にとって、出版者

は、十八世紀におけるパトロンの権限をも兼ねている。とりわけ新人作家は、出版者の意向に逆らうことは非常に難しくなった。ジェーン・オースティン、ブロンテ姉妹、サッカレー、ジョージ・エリオット、トロロープ等、十九世紀の主な作家・小説家でさえ、その処女作品を世に出すに当たっては辛酸を舐めた。オースティンが書簡に残した、出版社に対する苦渋に満ちた言葉や、女流作家が現代のような形で認められない状況の中で、窮余の一策として男性作家の名で世に出ようとしたブロンテ姉妹やジョージ・エリオット、売れない画家から作家へと変身したサッカレー、さらに郵政省の役人から転身したトロロープ等、いずれも出版者の鼻息をうかがいながら、処女作品出版の日を待ったのである。しかし、ただ一人ディケンズは、この範疇から外れる。彼の場合、「作家が出版者の意向に逆らえない」のではなく、処女作品出版の時点から「出版者が作家の意向に逆らえない」のである。以下、ディケンズが出版者たちにどのような姿勢をとったかを、初期の作品出版に関わった出版者たちとの確執を、R. L. パテン等の先行研究書によらず、主として書簡という第一義的資料を通して検証してみた上で、彼の特異性を明らかにする。ディケンズの最初の出版者マクローンとの確執から検討してみる。

ディケンズが、ジョン・マクローン (John Macrone) を始め、さまざまな出版者との間で出版契約に関して、次々と物議を醸したことは広く知られている。マクローンに続いて、チャップマン&ホール (Chapman & Hall)、リチャード・ベントリー (Richard Bentley)、さらには、ブラッドベリ&エヴァンズ (Bradbury & Evans) 等の出版者たちとの間で繰り返された壮絶な、いわば闘争をディケンズは経験している。彼の姿勢は、作家と出版者の関係を歴史的にみた時、「作家の権利意識の主張」と捉えることができるし、その延長として、アメリカ訪問 (第一回) の際の、「国際著作権」 ('international copyright') に関しての執拗な主張は、個人的なエゴを超えた、「作家の権利意識」として歴史的意味を持つと考えれば、より生産的な解釈と言える。

そのような、解釈と紙一重にあるのが、ディケンズの性格上の特異性である。彼の一連の友人関係の流れには、一定のパターンがあり、そこには彼の強い性格が反映している。最初良好な関係が維持されるが、ま

もなくその関係が何らかのきっかけで断絶し、ついには完全な敵対関係にまで発展するのである。その原因を精査すると、たとえば、作家と出版者という営利的に対立関係にある両者の間には、当然金銭の問題が生じ勝ちだとしても、ディケンズは時として常識を欠くとしか思えない行動に出る。少なくとも、客観的に判断した場合、彼のとった行為に賛同できない事例がしばしば見受けられるのである。その例を前述の出版者たちとの関係において検証してみたい。

最初に、一流作家としての地位を確立する以前のディケンズにアプローチしたのは、若い出版者（ディケンズより3歳年長）ジョン・マクローン（John Macrone, 1809-1837）である。1835年の秋頃、マクローンは『マンスリー・マガジン』（*The Monthly Magazine*）を始め、さまざまな定期刊行物に掲載され、好評を博していたディケンズのロンドンの情景のスケッチをまとめて、刊行したい希望を、エインズワース（W. Harrison Ainsworth, 1805-1882）を通してディケンズに打診する。エインズワースが仲介の労をとったのは、マクローンが彼の *Rookwood*（1834）を刊行した縁によるものと思われる。当時『モーニング・クロニクル』の報道記者という、経済的に不安定な中であって、キャサリン・ホガースとの結婚を急いでいたディケンズにとっては、歓迎すべき申し出であった。しかも、当代の人気挿絵画家クルックシャンク（George Cruikshank, 1792-1878）の挿絵付きという、願ってもない条件であった。こうして *Sketches By Boz, First Series* は発刊され、大成功を収める。

しかし、キャサリンとの結婚の際には、best man の役を演じてもらうほどに親密な関係にあったマクローンとの間が、程なくおかしなものになる。そのきっかけを暗示するのが、1836年5月9日付けのマクローン宛ディケンズの手紙である。

拝啓

マクローン様、

執筆予定の作品（普通サイズで三巻本）、『ロンドンの錠前屋、ゲイブリエル・ヴァードン』の初版（部数は精々一千部）に対して、二百ポンドを拝受できることは、小生の大きな喜びです。

もし、望ましいと考えられた場合、さらに何部かを増刷することについても同意しましょう。その場合、費用を差し引いた利潤は折半に

するという条件付です。

二百ポンドについては、十一月三十日、あるいはそれ以前、ないしはそれ以後の、できるだけ早い時期に、お互いに都合のよい日に完全原稿をお渡しする時に、お受けしたいと存じます……¹⁾。

ディケンズの高揚した気分が伝わってくるこの書簡が、なぜ両者の関係を危うくするきっかけになったのであろうか。この書簡から分かることは、ディケンズがマクローンとの間で、新しい小説執筆（作品のタイトルは『ゲイブリエル・ヴァードン』(*Gabriel Vardon*))を期限付きで約束し、さらに発行部数も限定した上で、利潤は折半にするという約束が取り交わされたと言う事実である。しかし、この書簡は、法的拘束力を持つ契約書とはいえない。なぜ、法的意味を持つ正式な契約同意書（‘Agreement’）が交わされなかったのであろうか。いろいろな理由が考えられるが、この時点で（1836年5月）、ディケンズはプロの作家としての自信をまだ持てなかったことが指摘できるだろう。この数ヶ月後には、月刊分冊（‘monthly parts’）として発刊されていた『ピクウィック・ペーパーズ』(*Pickwick Papers*, 1836-37)が爆発的な売れ行きを見せ、ディケンズは一朝にして、流行作家となるが、5月の時点では、月刊分冊では読者の反応が今ひとつであった。そのため、彼は通常の小説出版の形式どおり、「普通サイズで三巻本」の小説を出版する意向を示したと考えられる。

一方、報酬の受け方としては、「小説の初版……に対して二百ポンドを拝受できる」と言って、伝統的な支払い方式であった著作権売却による方式を採ろうとしているが、興味深いのは、「利潤は半々にする」という点である。これは、いわゆる印税方式とも違う支払い方式であり、利潤が出た場合のみ有効というものであった。同じ折半方式でも、損失が出た場合も折半にする方式もあるが、ここでは採用されていない。

出版形式、報酬の受領形式ともに曖昧な上に、さらに問題を大きくしたのは、両者の間に正式な契約書がなく、書簡による約束であったこと、原稿受け渡し日が曖昧なこと、さらに、この作品を優先的に執筆するとの約束がないこと等であった²⁾。このような無防備なディケンズの姿は、彼が次々と他の出版社とさまざまな作品執筆の約束を取り交わした事実に見れている。実は、この時点で（1836年5月）、チャップマン&ホー

ル社とは、月刊分冊『ピクウィック・ペーパーズ』（執筆中）、トマス・テッグ（Thomas Tegg, 1801-79）とは、子供向けの本（予定）、ベントリーとは、短編（*The Village Coquettes*）を、ジョン・ブレナム（John Braham, 1801-68）とは、笑劇（*The Strange Gentleman*）執筆の約束をしていた。また、同年8月には、ベントリーとの間で、翌年1月創刊の月刊誌『ベントリーズ・ミセラニー』（*Bentley's Miscellany*）の編集と、「タイトルは未定ながら、三巻本で、各巻1頁25行、320頁」の小説を執筆することを約束してしまう。

問題をさらに複雑にしたのは、ベントリーとの契約同意書の中に、「上記の小説が完成するまでは、チャールズ・ディケンズ氏は、いかなる作品も手がけてはならない」³⁾ことと、ディケンズが次に発表する作品についても、同一の条件であることが付帯条件として入っていたことである。これらの付帯条件は、既に契約済みのものを排除することを意味した。さらにすぐその後で、同じベントリーに対して別に小説を二編書くという約束をした上に、そのうちの一つは、書き上げる日取りまで決めてしまった。従って、1836年11月前後には、実行するしないは別として、都合8編の作品執筆と出版にかかわることになってしまったのである。ディケンズの超人的なエネルギーをもってしても、これらすべてをこなすことは不可能であることは明白であった。それでも、『ボズのスケッチ集』（*Second Series*）は遅延の末に、同年11月17日、当初の計画と違い、一巻本でどうにか出版された。

しかし、この前後からマクローンとの関係が怪しくなってくる。特に、ベントリーとの間で交わした契約の重さに、ディケンズは引きずられたようである。というのも、新しく執筆する作品に対して、ベントリーはマクローンが申し出た額の2.5倍（500ポンド）を提示したからである。しかも、他の作品に優先させるといふ付帯条項まで付いていた。ディケンズが若さを露呈するのはこの時である。既に小説出版で名を売り、したたかさでは人後に落ちない出版者ベントリーにディケンズは搦め捕られたのである。結局、ディケンズは、ベントリーとチャップマン&ホール社との契約を除き、他の契約を破棄するという大胆な行動に出る。

契約破棄を通告された出版者及びその関係者の中で、当然のようにマクローンが最も抵抗した。既にさまざまな広告媒体を通して、『ゲイブリエル・ヴァードン』の出版を宣伝していたマクローンは、1836年5月

に取り決めた約束の実行を迫った。窮したディケンズは、ベントリーやチャップマン&ホールに広告阻止を依頼する。それでも、マクローンの姿勢は強硬なため、遂にディケンズは、1837年1月に100ポンドという安さで、『ボズのスケッチ集』（First Series 及び Second Series）の版權を彼に売却することによって、『ボズのスケッチ集』の出版から完全に手を引く。代わりに、マクローンとの間で取り決めた『ゲイブリエル・ヴァードン』執筆を約束した、1836年5月9日の書簡を彼の手から取り戻すことに成功する。

しかし、マクローンとの確執は、これで幕を閉じたわけではない。さらに厄介な問題が『ボズのスケッチ集』に絡んで持ち上がる。版權を掌中に収めたマクローンは、今や巷間を席卷する勢いのある『ピクウィック・ペーパーズ』に倣って、月刊分冊で再刊する計画を公にしたのである。ディケンズは、これに対して激しく反対の声をあげた。ジョン・フォスターは、『ディケンズの生涯』の中で、次のようにディケンズの書簡を引用して、彼の主張を紹介している。

……マクローンが小生の『スケッチ集』を、『ピクウィック・ペーパーズ』とほとんど同じ版、同じ体裁の月刊分冊形式で新しく出そうと計画している旨耳にしました。これは、小生に甚大なる迷惑を及ぼすと思われます……⁴⁾。

なぜディケンズは反対したのであろうか。売却方式で版權を手放した以上、印税方式が法的に定まっていなかった状況では、正式にそれを最大限利用する権利はマクローンにあるわけであり、著者たりとも異議を唱える権利はないはずである。『ピクウィック・ペーパーズ』の売れ行きが爆発的に上昇し、瞬く間にディケンズは一流作家と見做されるようになったが、その成功の一端は、月刊分冊という出版形態に負うところがあった。ディケンズは、フォスター宛の書簡の中でさらに次のように主張している。

……言い換えれば、小生が『ピクウィック』の好評につけ込み、金儲けだけを目的にこの旧作 [『ボズのスケッチ集』] に新しい衣装を着せて読者に押し付ける了見だと誤解されたりするのは、もちろん絶対に

避けたいことは申すまでもありません。また、小生の名前が、同時に三種類の出版物の著者として、公衆の前に晒されることは、必ず悪評を招くことになろうと思われま⁵⁾す。

「新しい衣装を着せて」というのは、月刊分冊で出版することを指している。ディケンズが主張している反対理由は、一見妥当なようだが、必ずしも説得力のあるものではない。とりわけ、出版形式に関して見てみると、その後の行動と矛盾する点がはっきりする。月刊分冊終了後に三巻本で出すことは当時慣行であり、現に『オリヴァー』は月刊分冊の後で、三巻本で出ているし、マクローンが意図していた月刊分冊形式での『ボズのスケッチ集』は、後に1837年11月から39年6月にかけて、チャップマン&ホール社より出版されているのだ。さらに、「同時に三種類の出版物の著者として公衆の前に晒されること」への反発も説得力に欠ける。現に彼は、この前後8種類の出版物に関わっていたことは前述した通りである。

マクローン非難を繰り返したこの書簡の中で、ディケンズはフォースターに仲介役を依頼している。結論は、マクローン側が提示した二千ポンドで版權買戻しの挙に出ようというものであった。むろん、ディケンズにもフォースターにも、そのような大金を用意できるわけもなく、結局、チャップマン&ホール社が立替払いを申し出たのを幸いに、この件の決着を図ることになった。1837年1月5日にディケンズからマクローンに百ポンドと言う桁外れの安さで売却された『ボズのスケッチ集』の版權は、5ヵ月後に20倍の額で買い戻されることになる。金額を見ただけでは、いかにもマクローンの行為はあざといという印象である。

しかし、この件をマクローン側から見たらどうであろうか。『ボズのスケッチ集』の版權を所有している以上、彼はこの作品の処理を自由に出来る権利を持っていた。『ピクウィック』の成功が、一部月刊分冊という出版形式にあると認識した出版者マクローンが、この形式に倣おうとしたことに無理はないだろう。ディケンズからの回答に不満な彼は、彼の不誠実を詰るとともに、紹介者のエインズワースに助言を求める。それを受けて、事務弁護士の資格もあつたエインズワースは、直ちに法的措置をとるようマクローンに勧める。しかし、マクローンは法的措置をとらず、版權売却という方法で決着を図った。

以上が、『ボズのスケッチ集』出版に関するマクローンとディケンズの間で繰り広げられた対立、というより闘争の経緯である。最初の友好関係は、微塵に砕け、今や敵対関係に陥った原因を詳細に検討してみると、ディケンズの側に法的な瑕疵を見出すことは困難である。しかし、約束を実行に移すに当たり、ディケンズの姿勢は、金銭的な面に固執するあまり、健全な人間関係から逸れた行動を採ったと言われても仕方のないものである。自ら招いた状況を冷静に反省するなら、マクローンに対して別な対応の仕方があったと思われる。あるいは、ディケンズはそのことを理解した上で尚且つ自己の主張を譲らなかったとも言える。出版社との関係において、この事件以後のディケンズの行動をみると、後者の見方の方が的を射ていると思われる。彼の憤怒の度合いは、常識を超えるものがある。

マクローンとディケンズの対立で、ディケンズ側に立って彼をサポートしたのはフォースターであるが、彼の姿勢は後の批評家たちから偏っていると批判されている。彼の『ディケンズの生涯』の編者A.J. ホッペは、『ディケンズ伝』の著者J.W.T.リーの評言を援用して「……これらの問題 [マクローンを始め、ベントリー及びチャップマン&ホール社との処理の仕方] は、後年『ディケンズの生涯』においてそれらを語っている態度から推定されるように、客観性に欠くものであった」⁶⁾と述べている。事実、フォースターは生涯にわたりディケンズを支援し、彼の絶大な信頼を受けていた。ディケンズの特異な性格に忍耐の限度を自覚して、彼の許を去った多くの友人たちがいたことを思えば、彼は稀有な存在であった。

「ディケンズの特異な性格」は、一方的な攻撃に終わらず、闘いが終了した際には、相手への同情を示す時がある。というより、自己の行為や行動が異常だと意識していて、なおかつ、その行動を抑制できないで実行に移してしまうが、一方では、機会があれば、自己の理不尽な行為に対する償いを考える時があるのだ。マクローンの場合はまさにこのパターンに当てはまる。マクローンは、1837年9月に若くして急逝し、残された妻子に同情が集まった。ディケンズは、エインズワースを誘い、経済的に困窮しているマクローン未亡人と子供たちのために、オリジナルな小品を発刊し、売り上げ金を未亡人に贈与するという提案をする。マクローンと関わった作家からは原稿を、クルックシャンクやフィズな

どからは挿絵の提供を受け、その他多くの知人から寄付を募った結果、必然的に大きな事業となり、1838年8月にやっとディケンズと出版者コルバーンとの間でこの件に関する契約書が交わされた⁷⁾。その後、遅延に遅延を重ねて、3年後の1841年7月に『ピク・ニック・ペーパーズ』(*The Pic Nic Papers*)として、ヘンリー・コルバーン (Henry Colburn) から出版された。契約時には50ポンドを、出版時に400ポンドを未亡人に贈与することができた。

このように、マクローンとの確執は、彼の急死によって幕を閉じたが、未亡人救済の行為が、結果的にディケンズのよい面を社会的に強く印象付けた。しかし、それまでの彼の行為は、自己主張に終始し、時に自分を忘れており、そこには非情ささえ指摘できる。彼が、マクローンへの償いの行為を買って出たのは、自己の行為は否定すべきものだということを意識のどこかに引きずっていた証拠とも考えられるのである。

2. 「バーリントン・ストリートに棲む山賊」との死闘

しかし、同時期に関係したもう一人の出版者リチャード・ベントリー (Richard Bentley, 1794-1871) との間では、執筆契約に関して6ヶ月にも及ぶ、壮絶な闘争が繰り返されることになる。周知のように、ディケンズとベントリーとの関係は、1836年8月22日に2種類の小説執筆の契約をした時点から始まる。次いで、1836年11月4日に、月刊誌『ベントリーズ・ミセラニー』(*Bentley's Miscellany*, 1837-1867、以下『ミセラニー』)の編集とともに、各号に16頁のディケンズの「オリジナルの文章」('his own original article')を寄稿するという契約を結ぶ⁸⁾。同誌に『オリヴァー』を掲載し始めるのは、その「オリジナルの文章」について試行錯誤した結果である。結局、ディケンズのこの第二の小説は、創刊号(1837年1月1日発刊)には載らず、『ミセラニー』第二号から連載される⁹⁾。

『オリヴァー』の構想が最初に浮かんだのは、『ミセラニー』第一号発刊後であり、ベントリーには1837年1月18日付けの書簡でその案を披露した。「……次の号はすばらしいものとなるでしょう……すばらしい構想が浮かびました。クルックシャンクに〔挿絵の〕能力を発揮してもらいます¹⁰⁾と高揚した調子で、自己の案を称揚している。ベントリーの

返事はどのようなものであったのか、手元に資料がないが、おそらく賛同の意を表したものと思われる。当時(1837年前半)、ディケンズは、『ピクウィック』の最終場面に向け執筆中だったし、マクローンとの約束の『ボズのスケッチ集』第2シリーズ発刊にとりかかっていたし、また、既に見たように、同時に彼とは三巻本の小説執筆を約束していた。さらに、ベントリーとも同じ長さの二種の小説執筆も契約しており、前年に増して多忙を極めていた。しかも、妻キャサリンが体調を崩し、その看護にも時間がとられていた。しかし、新しく『オリヴァー』の進路を見出した喜びが、それらに打ち勝ったようである。「私は全身全霊を『オリヴァー』につき込む決意です。かならずや主人公の物語は、受け入れられ人口に膾炙するでしょう」¹¹⁾とベントリーに意気込みを語っている。

このように、出発時は両者の関係は良好であり、書簡集に見られるように、絶えず食事に招き合い、小旅行を互いに愉しんでいた。しかし、マクローンの場合と同様に、程なく両者の関係にひびが入ってくる。その一つの原因は、編集者ディケンズの承諾もなく、ベントリーやその他の者が勝手に自分の文章を『ミセラニー』の記事に割り込ませたり、改変する事態が起こるようになったことにある。書簡集を丹念に読んでみると、ディケンズは既に創刊号にその形跡を見てとっており、さっそくベントリーに抗議している。この時は、『ミセラニー』の印刷を担当していた、リチャードの実兄印刷屋のサミュエル・ベントリー (Samuel Bentley, 1785-1868) の仕業であったことが分かっている¹²⁾。

もう一つの原因は、ディケンズの一方向的な要求で契約の変更が繰り返されたことにある。(1837年3月17日、同年9月28日、1838年9月22日)。特に『オリヴァー』を、約束した二つの小説の内、最初の小説として扱いたいというディケンズの申し出(1837年7月14日)に対して、ベントリーは、その申し出は同じ作品に二重の支払いになるとして、これを拒否した時(1837年7月14日付け書簡)、両者の関係は険悪なものになった。ディケンズは、自己の作家としての評価は、最初の契約時に比して格段の差があり、それなりの支払いは当然と考えたのである¹³⁾。

ディケンズの姿勢は、マクローンの場合と全く同質の感覚に繋がるものである。ディケンズは、ベントリーをフェイギンになぞらえて「略奪をくり返し、がなり立てる、金に汚い、悪魔のような老ユダヤ人」(‘infernally rich, plundering, thundering old Jew’)¹⁴⁾と罵倒するように

なった。相手への不信任感、特にディケンズのベントリーに対する抜き難い不信任感、両者の関係を増悪させた。

さらに、ディケンズが編者となって以来、『ミセラニー』に掲載される予定の『オリヴァー』が中断されるという由々しい出来事が三度起きている。一度目は1837年6月である。5月7日の義妹メアリー・ホガースの急死に加え、妻キャサリンの流産という二重のショックに打ちのめされ、ディケンズはペンを取る事も出来なかった。この出来事は、ベントリーとの関係よりも、『ピクウィック・ペーパーズ』の出版社チャップマン&ホールにより大きな影響を与えたことでも知られている。いづれにせよ、これはベントリーとは無関係の理由からであったので、後の二つのケースとは、区別されるべきである。

しかし、第三者による本文改変や修正に対するディケンズの抗議と怒りがきっかけとなった、1837年10月の執筆中断は、両者の関係を一段と深刻なものにした。ディケンズは、まだ『ミセラニー』が創刊される以前に、ベントリー宛て書簡の中で、「私以外のいかなる者も『ミセラニー』[の編集に対する]干渉は許しません」¹⁵⁾と強く編集者としての決意と権限を伝えていたし、既に1836年11月4日の契約同意書の第二条にも「必要な時は、掲載記事を改定と修正をし、さらに校正刷りを修正し、印刷所に送ることを[編者]の義務とする」と書き加えていた¹⁶⁾。

しかし、ディケンズの強い主張にもかかわらず、ベントリーは、改変という違反を繰り返したのである。ディケンズが既に『オリヴァー』二号が掲載されていた1837年3月29日付けのベントリー宛書簡でも、「『ミセラニー』の内容を[勝手に]変更されたことにより甚大な被害を蒙ったことは大変遺憾に思います」¹⁷⁾と怒りをぶちまけている。ベントリーが、再三のディケンズの警告を無視するような態度をとったのは、ディケンズの年齢的な若さ(若干25歳)を軽く見たこと、出版者としての経験に胡座をかいたことにあるだろう。ディケンズが他の作家のように、「出版者の言いなりになる作家」ではなく、「出版者を自己の意向に従わせる作家」であることを認識していなかったことが、ベントリーの失点であった。

ついに、抜き差しならない出来事に両者は遭遇する。再び、ベントリーは『ミセラニー』の本文に無断で改変を加えたのである。ディケンズは、1837年9月16日付けのベントリー宛書簡で、彼を直接難詰し、雑

誌の編集者の地位を降りるとまで言い放つ。

……こういう行為をされたのでは、小生は『ミセラニー』の編集者としての立場を奪われたも同然です。これは、貴殿が小生との間で交わした契約を真っ向から踏みにじる行為であり、小生への酷い侮辱と言えます。従って、以後『ミセラニー』の編集も、同誌への寄稿も拒否するつもりです¹⁸⁾。

ディケンズの突然の辞意表明に驚いたベントリーは、すぐさま返信を送り、「もしあなたの表明されたことを変えられないなら、小生としては、弁護士に相談する他ありません」と脅す一方で、「お互い友好的な関係を持ち続けることによって、問題の解決を図れることを希望します」¹⁹⁾と下手に出て、ディケンズの怒りを鎮めようとする。後で検討するが、この時、ベントリーは、ディケンズから直接この件を聞いたクルックシャンクから、問題收拾の方法はディケンズの主張に従うことだとアドバイスを受けている。結局、ディケンズは、一旦怒りの矛を収める代わりに、多忙を理由に契約の変更を申し出る。それにベントリーも応じ、遅延の結果、1837年9月28日に8項目に及ぶ新たに契約がなされることになる²⁰⁾。変更の主な点は、「『オリヴァー』を翌年の6月下旬[Midsummer]まで連載すること」であった。ディケンズは、この時点でもいわば老練なベントリーに搦め捕られた印象がある。それだけ怒りは、胸の奥で燻っていたようである。事実、それまで焦らされたことへの復讐をするかのように、ディケンズは『オリヴァー』の連載期間を9月へとずれ込ませた。

ディケンズの意識としては、編者である自分のみが本文の修正や改定の権利があり、他のいかなる者もその権利はないと固い信念を持っていた。一方、ベントリーは、寄稿の内容に不満の場合は、雑誌のオーナーの権利として、改変や修正は許されていたと考えていたようである。ディケンズの姿勢は、編集者の権利意識として、称揚されてしかるべきではある。

それでは、1838年9月に起こった、三度目の『オリヴァー』執筆中断はどのように解釈すればよいのだろうか。その理由に、ディケンズは相も変らぬ多忙な執筆活動をあげている。1838年に入り、チャップマン&

ホール社との間で『ニコラス・ニッケルビー』を4月から書き始めること、1838年11月までには、『ゲイブリエル・ヴァードン』改め『バーナビー・ラッジ』を書き終えることをベントリーと約束していた。一方、『ミセラニー』の編集と『オリヴァー』執筆は続くわけである。あまりの多忙に、遂に、ディケンズは1838年2月10日にベントリーに契約変更を再び申し出る書簡を送る。フォースターもこの件が重要と見て、『ディケンズの生涯』の中で、その書簡の内容を明らかにしている。

……近頃『バーナビー・ラッジ』について随分と考えてきました。『ピクウィック』完結以来、この新しい小説を書き始めるまでの合間を、すっかり『グリマルディ』に喰われてしまい、現在、この小説を予定通りの期限に書き上げて小生自身の能力を十分に發揮し、また、貴社の収益に寄与することは全く不可能と判断される次第です。よって、次の提案をご検討いただきたく存じます……『オリヴァー』が完結したら、続けて次の号の『ミセラニー』誌に『バーナード・ラッジ』を書き始め、前者と同期間連載を続け、終わった時点で三冊本として出版するという案です……²¹⁾。

ディケンズは、さらにこの案のさまざまなメリットを書き加えている。メリットがいかなるものであれ、度重なる契約の変更 [1837年3月17日と同年9月28日と既に二度契約変更がなされている] であることに違いはない。ベントリーによる直接の回答の言葉は見出されないが、5日後のフォースター宛の書簡にその間の事情が記されている。

……ベントリーが昨日ここ [ダウティ・ストリート] にやって来ました。彼は『バーナビー・ラッジ』については、ただちに諦めますので早速モロイ [Charles Molloy, ディケンズの事務弁護士] に命じて、私が希望した通りに契約の変更をして結構だと言いました……²²⁾。

ディケンズの得意気な声が聞こえるような書簡の内容だが、実は、これが「6ヶ月の論争」(‘six months’s wrangling’) と呼ばれる、両者の真の闘争の始まりであった。事実、ベントリーがO.K.を出して変更された契約書に署名されたのは、前述したように、7ヵ月後の1838年9月22

日であったし、『バーナビー・ラッジ』の件についても、約束を違えてベントリーは勝手に『ミセラニー』4月号に「ボズによる三巻本の新刊」の広告を出している²³⁾。しかし、ディケンズも自分の方から契約変更を求めながら、契約署名を延期したままにするという、一見杜撰な対応をしている。

ここで、ディケンズとベントリーとの間で繰り返された主な契約変更について確認しておこう。1836年8月22日に、ディケンズは二種類の小説（三巻本）執筆をベントリーとの間で同意した。一つは『バーナビー・ラッジ』であり、他の一つはタイトル未定であった。1837年7月14日のベントリー宛書簡でディケンズは、連載中の『オリヴァー』を三巻本にまとめ、もう一つの「タイトル未定的小説」に代えたいとベントリーに提案する。この申し出は、1836年8月22日の合意内容に抵触するものであるし、前述したように、ベントリーは、それは同一作品に二重の支払いをすることになるので、一旦は拒否したが、あらためてディケンズの申し出を認めて、1837年9月28日に契約変更合意する。この7月14日の書簡には、『バーナビー・ラッジ』の完成原稿の引渡し日を1838年3月1日にするということも合意内容として書かれていた。この内容も、1838年9月22日に変更された25項目に及ぶ契約同意書では、1838年10月「前後」(‘before or during’)に延期されている。最終的に、1839年2月に『ミセラニー』の編集から手を引いたディケンズは、ベントリーとの関係を絶ち、『バーナビー・ラッジ』は、1841年にチャップマン&ホール社から出版されることになる。

以上が、ディケンズとベントリーのとの間で繰り返された凄絶な闘いのあらましである。次に、ディケンズが直面した問題に対して、彼がどのような姿勢で臨んだかを検討してみよう。一つは、『ミセラニー』の编者としての立場を侵害されたケースである。ディケンズは、编者を引き受けた以上、寄稿された内容の検分は自分ひとりの責任でもあり、権限でもあると言う強い信念を持っており、それを実行に移していた。雑誌の方向付けも内容の変更の決定と実行、つまりこのプロジェクトのすべては自己の自由にできるものであり、オーナーといえども勝手に承諾なしに修正や変更は許されないというものであった。確かに、このディケンズの姿勢は、編集という職務への誠実さと責任感の強さを証明するものとして称賛されてしかるべきであろう。

問題は、侵害を受けた時のディケンズの採った手段と姿勢である。彼は、直ちに編集者の職務を下りるだけでなく、『オリヴァー』執筆の中止を一方的に宣言するという極端な手段に訴える。相手との関係に配慮しながら、段階を追って自己の立場を明らかにするのではなく、一気に最後通告を突きつけるのである。ベントリーは最初、ディケンズの怒りがこれほど尋常でないことに気付かなかったようである。第二回目の契約変更がなされる前の、1837年8月12日に、ベントリーはディケンズの指示を受けて、ダウティ・ストリートの彼の自宅で会い、『オリヴァー』を二つの小説の一つに数えるというディケンズの要求をあらためて拒否しようとする。

……これに対して、彼〔ディケンズ〕は非常な苛立ちを見せ、乱暴な言葉を浴びせてきた上に、小説〔『オリヴァー』〕は決して書かないと恫喝するのです。彼の目的は私を挑発することにあることは明白でした。彼はそれに失敗すると、今度はこの件を法廷弁護士タルファッドの仲裁に任せるがよいかと詰め寄ってきた²⁴⁾。

この証言は、回想であり、目撃者はいないが、いかにもあり得た光景と思われる。ディケンズの苛立ちと性急さは、『オリヴァー』の挿絵を担当していたクルックシャンクへの書簡にも表われている。編集と『オリヴァー』執筆の中止をベントリーに通告した同日、ディケンズはクルックシャンクに、ベントリーの行為を非難した挙句、「弁護士を通じて小生の決意を伝えるつもりだ」と付け加えている。さらに、クルックシャンクが両者の仲介を買って出ることも拒否してしまう。「[小生が]『ミセラニー』の編集の職務を降りた以上、貴殿が『オリヴァー』に関して仲介の労をとる必要はもうないと思います」²⁵⁾と興奮した書簡を立て続けにクルックシャンクに書き送っている。

クルックシャンクは、ディケンズからの上記の書簡を受け取るや、直ちにベントリーに何らかの友好的な処置を取るための手段を考えるように忠告する。「もし、その日〔クルックシャンクがディケンズの弁護士に会う日〕までに問題を解決しなければ、『オリヴァー』の次号の掲載は不可能でしょう」²⁶⁾。クルックシャンクは、大人の対応をベントリーに求めたのに応じて、既に言及したように、ベントリーはディケンズと

の対決を回避し、10日後 [1837年 9月28日] 新たな契約に同意する。そこには、編集の給料を30ポンドに引き上げること、『ミセラニー』の売り上げが六千部に達すれば、さらにボーナスを提供すること、さらにディケンズが『ミセラニー』に書いた記事の著作権の50%を彼に与えること、3年後に『オリヴァー』と『バーナビー・ラッジ』の原稿を返すこと等、ディケンズに有利な条件が書かれている²⁷⁾。

この三度目の契約同意書のそもそもの発端は、著作権侵害とも言うべき行為を行ったベントリーの側に責任の一端はあるとは言え、ディケンズの反応は常軌を逸したかと思われるほど強い憤怒の姿を露呈している。直ちに法的手段に訴えると言うディケンズの性急さは、出版界のしきたりに精通していたベントリーとクルックシャンクに異質の作家の登場を予見させたであろう。彼らが、ディケンズの要求に押し切られたことは、弱冠25歳の新進作家のとてつもない力を自他共に認めたことになる。しかし、ディケンズは、この時点で、まだ『ボズのスケッチ集』、『ピクウィック・ペーパーズ』そして『オリヴァー』を世に出したに過ぎない。この若い作家が、後に多くの読者を魅了する傑作を次々に物することになったことを思えば、彼らの判断と対応は、結局誤っていなかったことを意味するだろう。

しかし、他方、ディケンズの性格的な面にも光を当てる必要がある。客観的なデータを基にした『ディケンズ伝』の著者アクロイドは、「この争い [ディケンズ vs.ベントリー] を通じて顕著な点は、自己の要求に対して、回答を待ちきれないディケンズの性急さであり、一連の交渉で彼が抱いた苛立ちと怒りは、問題の解決が即座になされないとの思いから生じている²⁸⁾と説明している。ベントリーとの闘いを「バーリントン・ストリートの山賊との死闘」(‘war to the knife...with the Burlington Street Brigand’)と銘打ち、彼を窃盗団の頭「フェイギン」に見立てたディケンズの心情は、彼が『ミセラニー』の編集者の座を降りた(1839年2月)後にも続いていたという点、マクローンのケースと少々趣を異にしているとは言え、良好関係から一気に断絶へと向かう状況は、特有のパターンを踏襲している。

ディケンズが、出版者に対する自己の行為を、作家の権利とでもいうように声高に主張する背景には、著作権(copyright)延長の機運に乗ったものとの解釈も成立するかもしれない。事実、丁度この時期(1837

年5月18日)は、タルファッド(Thomas Noon Talfourd, 1795-1854)による著作権法が議会で提出され、著作権の期間延長の話題が盛り上がっていた時期であった。彼の法案のポイントは、著作権を作者の死後30年まで延長するという内容であった。結局、最終的には勅令により、1842年7月1日に、「作家の死後7年、あるいは42年間」が著作権の期間と決定し、1911年まで発効することになった。ディケンズは、作家の力強い精神的パトロンともいべき年長の彼の知己を得て、ベントリーとの論争の際に彼の助言も得ている。当時の彼への心酔ぶりは、『ピクウィック・ペーパーズ』が彼に献呈されたことにも表われている。

このように、公的で外的な影響も考えられるが、19世紀の他の作家で、出版者への対応がディケンズにおけるように激烈な形で表われた者はいない。とすれば、マクローンやベントリーに対する、断固としたディケンズの姿勢は、性急さと苛立ちに陥りやすい彼の性格的な特異性も大きな要因であるといえよう。それは、別稿で論じるように、出版者たちだけに向けられたものではないからである。

以上、本論では、苛立ちと性急さというディケンズの性格的な面を強調した。それが一過性の事でないことは、ほぼ10年後(1846年)に、『デイリー・ニューズ』(*The Daily News*)の編集者という華やかな座をわずか3週間[1846年1月21日～2月9日]に満たずに、彼が放擲したことと相通ずるであろう。良好な関係から突然のその断絶のパターンは、彼の小説と切り離せない挿絵画家との関係においても跡付けることができる。そこでは、単に人間関係やマノンの問題の他に、彼の文学的感性の問題が浮上する。

注

- 1) Storey eds., *The Pilgrim Edition, The Letters of Charles Dickens*, (Clarendon Press, 1965), Vol. I, p.150.
- 2) 『ディケンズ書簡集』の編者は、「エインズワースとマクローンとの間に交わされた書簡を精査すると、契約書らしいものがあったかもしれないが、特定できていない」と述べている。See *The Letters*, Vol., I, p.647.
- 3) Storey eds., *op. cit.*, pp.649-670.
- 4) 宮崎孝一他訳『定本チャールズ・ディケンズの生涯』研友社 昭和60年上巻、56頁。
- 5) 同書、56頁。

- 6) 同書、397頁。
- 7) Storey eds., *op. cit.*, pp. 664-665.
- 8) *Ibid.*, p.651.
- 9) ディケンズは一号に‘Public Life of Mr. Mulrumbly, Once Mayor of Mudfog’なるユーモラスな小品を寄稿している。
- 10) Storey eds., *op. cit.*, pp.223-224.
- 11) *Ibid.*, p.227. 1837年1月24日付ベントリー宛書簡。
- 12) Samuel Bentley (1785-1868) は、リチャード・ベントリーの兄で印刷業者。リチャードと組んで、多くの作品を印刷。彼は、芸術家を気に入り、印刷したものに手を入れるという評判が立っていた。
- 13) See Paul Schlicke, *Oxford Reader's Companion to Dickens*, (Oxford Univ. Press, 1999), p.428.
- 14) Storey eds., *op. cit.*, p.292. 1837年8月5日のフォースター宛書簡。
- 15) *Ibid.*, p.224.
- 16) *Ibid.*, p.224. n.1.
- 17) *Ibid.*, pp.243-244.
- 18) *Ibid.*, p.308.
- 19) *Ibid.*, p.309. n.1.
- 20) *Ibid.*, pp.668-674.
- 21) 宮崎孝一他訳、前掲書。71頁。
- 22) Storey eds., *op. cit.*, p.374.
- 23) *Ibid.*, p.374. n.1.
- 24) *Ibid.*, p.292. n.5.
- 25) *Ibid.*, p.309.
- 26) *Ibid.*, p.308. n.1.
- 27) *Ibid.*, p.654.
- 28) Peter Ackroyd, *Dickens* (Vintage, 1990), p.249.